

友愛平和の風——世界へのア ト・オブ・ピース

状況認識：世界史的分岐点

3・11の東日本大震災と原発事故を経て、いま、日本は大きな分岐点にある。一方では、大震災によって改めて助け合いや絆の意義が自覚されるようになり、原発問題・エネルギー問題に対して多くの人が関心を深めて、紫陽花革命と呼ばれるような官邸前のデモが注目を集め、パブリック・コメントや熟議世論調査の結果として、熟考に基づく良質な民意が示された。ここには、友愛や平和、そして脱原発へと向かう風、つまり友愛平和への風が吹き始めており、新しい良質な民主主義への息吹が感じられる。

他方では、こういった民意を無視して原発を維持しようという画策も見られ、偏狭な国家主義に基づき武力を積極的に行使する政治を復活させようという流れも存在する。そして、日中韓の領土問題が激化して、最悪の場合は、東アジアで武力衝突や戦争が生じる危険も想定せざるをえなくなっている。また、日本政治においては集団的自衛権の行使を認めたり、平和憲法を改定しようとする動きも加速する可能性が存在する。

そして、これは世界の縮図でもある。オバマ政権の登場により、イラク戦争が終結し、「核なき世界」へのビジョンがアメリカから発信され、核廃絶という夢が現実的な課題となった。核戦争による人類滅亡というような悪夢から遂に解放される可能性が現実的に浮上したのである。また、「ウォール街を占拠せよ」というデモのように、貧富の格差をめぐって「正義」が問われるに至った。そして、ドイツのように脱原発への決定を下す国も現れ、脱原発への動きは世界的に広がりを持つに至った。

しかし、他方で、ヨーロッパの経済危機は予断を許さず、中東ではシリアのように紛争や戦闘も行われ、イランの核疑惑などが戦争を引き起こす懸念すらある。

理念と目的：地球的な友愛正義と平和・環境・福祉

このような世界的な分岐点にあつて、私たちは、大きな目的として、広島・長崎・ビキニの被爆や福島原発の被曝という二重の体験に基づき、日本から、友愛（愛・慈悲・仁など）と正義を中心的理念として、地球的核問題（原発と原発）の解決をはじめ地球的な平和・環境・福祉問題に対して、なるべく多くの人びとの地球的結集を図りたいと思う。

戦争か平和か、核戦争か「核なき世界」か、原発に頼る世界か脱原発か、環境汚染か地球環境の保全か、貧困か福祉か。これらはいずれも公共的な正義の問題であり、究極的には地球全体において友愛が人びとの心に灯って現実の世界を動かすことができるかどうかにかかっている。

そこで、私たちは、地球的友愛（愛・慈悲・仁など）ないし人類愛（兄弟愛・姉妹愛）を根本的な理念として、人種・民族・宗教などの相違を越え、地球人としてのグローバル・アイデンティティーに基づき、地上に恒久平和と良い環境・福祉という共通の善と正義を実現することを目指す。友愛に基づいて平和・環境・福祉という共通の善が実現する世界を「友愛世界」と呼ぶことにし、その実現を集約的に「友愛平和」という概念で表すことにする。

このような理念と目的を実現するために、私たちは「友愛平和の風」という地球的なムーブメントを引き起こしたい。平和運動というと、かつての左翼的ないし極左的な運動のイメージが強く、しばしば闘争的・攻撃的で暗い印象がまわりついていて、平和を願う多くの人びとから敬遠される傾向が存在する。そこで、私たちは、既存の左右のイデオロギー対立のイメージを超え、新しい時代の感覚に即して、平和を希求する人びとが広く関わるような、明るく、楽しく、和やかで、愛と希望に満ちた新しいムーブメントを創出したい。いわば、このような「ポジティブ・ピース・ムーブメント」の「風」が地球中に吹き渡ることによって、この惑星に友愛に満ちた平和な世界が現出することが私たちの心からの願いである。

ポジティブ・ピース・ムーブメントの精神：差違を 超えた公共的な和

現実の様々な論点においては、このような志を共にする人びとの間でも意見の相違は存在しうる。公共的な活動や世界においては、大きな共通性が存在する中においても、多様性や差異は尊重されなければならない。公共性とは、個人性・多様性と、社会性・共通性との双方が尊重され、そのバランスがとれるところに成立するからである。

そこで、大きな目的やビジョンを最終的に実現するためには、差違を乗り越えて、友愛に基づき公共的な和（調和）を保つことが重要である。そこで、私たちは、愛に基づき、「和して同ぜず」（『論語』子路篇）という「和」（調和）の精神で協働することを旨とする。「小異を捨てて大同につく」という表現があるが、私たちは、差異を消す小さな同一性ではなく、差異を尊重しつつ協同するというような大きく豊かな「大同」の理想の実現を目指し、いわば「小異を尊重しつつ大同を図る」ムーブメントを実現したい。

実際には、多くの団体が私たちと共通の目的を目指してそれぞれの形で努力を続けている。しかし、他方でそれぞれの団体の考え方や行動には差違も存在するので、その間で連帯して行動することには問題が生まれがちである。そこで、私たちは、人びとが多様な党派や宗派に属しつつも、それを超えて共通の目的のために、超党派的・超宗派的に連帯し、緩やかに結集することを目指す。このことを可能にするために、私たちの運動においては、内部で党派的・宗派的な勧誘などは行わないように心がける。また、このような緩やかな結集を困難にするような、暴力的ないし反社会的な党派・宗派とは一線を画す。

ポジティブ・ピース・ムーブメントの性格：「友愛 平和の対話」によるダイナミックな展開

また、大きな志を共にする人びとの間でも、具体的な課題については様々な意見が存在しうるので、意見の一致を無理に求めず、個々人の行動の自由を尊重する。そして、友愛に基づく対話によりお互いの意見が深化していくことを目指す。これを「友愛平和の対話（ダイアログ）」と呼ぶことにしよう。それによって、参加者の意見が変化していくことも充分にありえるので、それを可能にするような対話や熟議の場を積極的に設ける。

たとえば、友愛平和・環境・福祉の実現のために対話集会を開催すれば、それを通じて私たち自身の意見が深化し、参加者を通じて広く人びとの意識を高めていくことが可能になるだろう。意見の相違を認識しつつお互いに承認しあい、共通の大きな目標の達成に向けて行動していくことが可能になるだろう。予め設定された目標や行動を行うのではなく、このような対話によって誕生する考え方を尊重し、実践的行動を行うことによって、新しいダイナミック（動的）な運動を展開することが可能になるだろう。私たちは、このようにして運動やその具体的な目標が対話的に、そしてダイナミックに発展させていくことを目指す。

具体的課題：反核脱原発・非戦とグローバルな環境、福祉

このような友愛と和の精神に基づき、私たちは具体的には次のような考え方や論点について真摯な対話を行い、有志で様々なアクションを行いたい。

まず、反核脱原発に関して、広島・長崎の悪夢を体験した多くの日本人が心底から知っているように、核兵器の使用こそは、地球人類の生存を脅かす絶対的な悪であり、友愛と全く相反する不正義である。これを必要悪として維持することも、倫理的に許されない。だから、私たちは一刻も早く地球的友愛に基づき世界の核兵器を廃絶し「核なき世界」という大理想を実現することを目指す。エネルギーの確保は、核兵器のような武器問題や安全保障の問題とは無関係に、平和的な方法で行われなければならない。このために、日本では核武装を可能にするための原発や核燃料サイクルはすぐに中止し、そしてこれらを可能にする法律はすぐに改正すべきである。

また、現行原発のように核分裂エネルギーを利用すると、危険な核廃棄物を生み出して将来世代に禍根を残すし、安全性も完全には確保できず、万一再び大きな原発事故が起こると立地地域の周辺を中心にして人命や健康に多大な被害が発生する。このようなエネルギー利用は友愛や正義に反する疑いがあるので、可能な限り速やかにこのようなエネルギー利用の形態は廃止し、自然エネルギーなどをはじめとする別のエネルギーへと移行すべきである。

さらに、核戦争だけではなく、そもそも地上に再び戦争が起こらないように、地球的に非戦の世界の実現を目指すことが必要である。東アジアの領土紛

争が再び武力衝突や戦争になってしまうことを防止し、この地域に友愛平和の関係を築くことが必要である。そして、全世界においても戦争が再び起こることを防止し、非戦平和の世界を実現することが必要である。

さらに日本国憲法第9条に定められているような非戦の原理が世界大に拡大し、将来は恒久平和を実現するために、国際連合の強化や、さらには地球連合（ないし地球連邦）などの形成、そして非戦を定める地球的憲章の制定などが理想として論じられるべきであろう。そのような世界の実現を目指しつつ、東アジアや中東をはじめ、世界的に和解による紛争の解決を目指し、紛争地域で決して戦争が再び起こらず、友好関係が実現できるように、最大限に平和的な努力が行われるべきである。

次に、原発事故による放射能汚染は再び環境保全の必要性を想起させた。日本で公害問題が発生したように、発展途上国の経済成長のためもあって、今は世界的に水・土地・空気をはじめ地球環境汚染や森林などの環境破壊が進んでいる。これは、地球や地域を傷つけており、私たちは環境に対しても世界に対する愛の精神をもってその再生を願っている。そこで、地球環境問題と、国家や地域における環境問題の双方の解決を目指して、グローバル（グローバルかつローカル）な環境悪化を阻止し、環境保全や環境の改善を目指すべきである。

さらに、ウォール街のデモが象徴的に示しているように、貧困問題はアメリカ国内や、日本国内でも深刻化しているし、またアフリカの飢餓や病気が示しているように世界的にはさらに深刻な状況が存在している。発展途上国では3秒に1人の子どもが死んでいると言われるような世界の貧困問題に関しては、MDGs（国連ミレニアム開発目標）達成のための努力がなされているが、その目標達成には現在よりも遙かに多くの関心と努力が必要である。国内・国外の双方において、貧困問題を解決するためには、友愛に基づいて人びとが分かち合うことが必要である。そこで、グローバルな福祉、つまり地球的な福祉と、地域的な福祉の双方を向上させていくべきである。

ただし、私たちのムーブメントがこのような考え方を前提とし、全員が個々の論点に合意しているというわけではない。私たちはこれらの論点について、対話により多くの人びとが真剣に考えるように促し、様々な目標について合意した個々人が有志で行動を起こすことを可能にしたいと願っている。

友愛公共平和の政治経済

さらに、平和・環境・福祉を実現するためには、政治的決定が必要だから、やはり政治的な発言や行動も避けては通れない。そこで、私たちは政治的な論点についても積極的に対話を促進し、党派的な党争に巻き込まれないように留意して、個々人の自由意思を尊重しつつ、有志によって友愛に基づき、党派を超えた政治的ないし公共的な発言や行動を行い、いずれは友愛公共政治が実現してゆくことを目指す。たとえば、選挙の際には、上記の目的や課題を実現させるため、個々人が自由に有志で立候補者や政党などを応援することは可能である。

友愛公共政治とは、友愛に基づいて、多様な個人が共に生きる社会、個人性・多様性と社会性・共通性が両立するような公共的世界を実現させる政治である。また、上記の課題の実現のためには、経済の変革も必要であろう。友愛平和の達成のための経済についても、私たちは対話を促進することによって、平和的な経済発展が可能になるように、友愛経済のビジョンや政策についての議論を喚起し、必要に応じて有志により超党派的な提案や行動を行うことにする。経済における公共善の実現という点に注目すれば、友愛経済は友愛公共経済でもある。このような友愛公共政治や友愛公共経済への努力により、いわば友愛公共世界への道が開かれ、友愛公共平和が実現していくことを望みたい。

実現方法：対話・祈り・芸術によるアート・オブ・ピース

このような目標の実現のためには、かつての過激な運動のような闘争的・暴力的な方法ではなく、スピリチュアルな友愛に基づいた非暴力的・平和的方法を用いる必要がある。外的平和を実現するためには内的平和（平安）を一人一人の心に築くことが必要であり、内的平和が外的平和を促し、外的平和を求めることが内的平和の構築につながるような好循環を生み出すことが重要である。

このために、私たちは、友愛平和の対話に加えて、様々な多様性や意見の相違、人種・民族や党派や宗派の相違を超え、友愛平和・環境・福祉のために共に祈ることを提案したい。祈りや瞑想は個々人の内的平和を達成するために有益であるとともに、それを人びとが共に行うことは集合的な力となって外的平和を達成するためにも有益である。友愛に基づく、このような超宗派的・超党

派的な祈りや瞑想を「友愛平和の祈り（瞑想、以下同様）」と呼ぶことにしたい。たとえば、平和のための集会などの最初や終わりに、「友愛平和の祈り」を行うことによって、意見の対立があっても、調和を達成することができるだろう。

そして、平和や環境・福祉の実現のためには理性的な議論や主張とともに、音楽や演劇・映像などの方法を用い、人びとの感性に訴えて、芸術的な活動や訴えを行っていくことも有益である。これを「友愛平和の芸術」と呼ぶことができるだろう。

全世界に友愛平和の風を吹き渡らせるためには、新しいアート・オブ・ピースが必要である。アートという言葉は、美しい芸術とともに、実践的な技術ないし技芸を表すので、私たちは、アート・オブ・ピースとして、「友愛平和の対話・祈り・芸術」などを積極的に開発したい。そして、これらによる「友愛平和のキャンペーン」なども行って、新しい平和のムーブメントをこの惑星全体に巻き起こすことを目指す。

友愛世界への風：広島・長崎、そして福島への誓い

私たちは、この友愛平和のムーブメントを通じて、何よりも「友愛世界」への風を巻き起こし、地球的な友愛平和への意識が高まっていくことを目指す。多様性や意見の相違を尊重するので、たとえこの運動で具体的な行動を起こすにしても、呼びかけ人も含め、その全ての人が個々の行動に同意したり賛成したりすることは求めない。個々人の自由な意思を尊重しつつ、「和」の精神で多くの人びとが緩やかに結集することにより、友愛平和の風を地球中に吹き渡らせたい。

広島・長崎、そして福島というように、悲惨な出来事を経験した私たちは、その経験に基づいて、二度と被爆や被曝、そして戦争が起こらないように力を尽くし、核なき世界、そして非戦世界の実現を目指す。そして、これによって地球の危機を回避し、地球的な友愛により平和・良き環境・福祉という公共善を実現することを、改めて心に誓う。

呼びかけ人

稲垣久和（東京基督教大学教授・公共哲学）、上村雄彦（横浜市立大学教授・地球政治論）、鎌田東二（京都大学こころの未来研究センター教授・宗教哲学）、賀川督明（賀川記念館館長）、加山久夫（賀川豊彦記念松沢資料館館長）、きくちゆみ（環境・平和活動家／ハーモニクスライフセンター代表）、小林正弥（千葉大学教授・政治哲学）、三遊亭京楽（落語家・五代目円楽一門）、田口富久治（名古屋大学名誉教授・政治学）、千勝良朗（千勝神社宮司）、千葉眞（国際基督教大学教授・政治思想）、野田武志（有限会社オール・アズ・ワン）、長谷川智（湧気行代表）、平野慶次（京都市民）、比嘉良丸（こころのかけはし祈りの和）、深井慈子（千葉大学客員教授・国際政治学）、本山一博（玉光神社権宮司）、八代江津子（Tewassa代表）、吉田魯参（仏法山禅源寺住持）、渡邊宗禅（臨済宗廣濟寺住職）

賛同人

青山治城（神田外語大学・法哲学）、新井光興（救世真教会長）、イソップ（南砺まちづくり市民会議）、板垣雄三（東京大学名誉教授・イスラーム学）、加藤節（成蹊大学教授・政治哲学）、古在豊樹（千葉大学名誉教授・農業環境工学）、鬼頭秀一（東京大学教授・環境倫理学）、神尾学（ホリスティック・リーディング研究所）、木村智恵（世田谷区民）、黒住真（東京大学教授・倫理学）、小泉義仁（NGOスピリチュアルTV）、庄司真理子（敬愛大学教授・国際政治学）、佐藤香織（東日本大震災・心の交流会）、佐藤壮広（宗教人類学者）、佐藤学（学習院大学文学部教授・教育学）、佐藤秀海（家相建築設計事務所代表）、佐藤研（立教大学教授・宗教学）、島田和子（JAIA）、杉浦秀典（賀川豊彦記念松沢資料館副館長）、鈴木規夫（愛知大学教授・政治学）、戸松義晴（全日本仏教会前事務総長）、西川潤（早稲田大学名誉教授・経済学）、坊理可（フィロソフィア）、細田満和子（星槎大学教授・社会学）、松本哲弥（㈱ナインハーツ取締役）、森中定治（日本生物地理学会・生物学）、宮平望（西南学院大学教授・神学）、山脇直司（東京大学・公共哲学）、芳村正徳（神習教教主）、渡辺和子（一般社団法人 命・地球・平和産業協会理事）、渡辺武達（同志社大学教授・メディア学）、渡邊りよ（フィロソフィア）